闘犬のまどろみ

あこぎな商売でお金を稼ぎ、人を苦しめる父が大嫌いで、十五歳で実家を飛び出した気骨溢れるお嬢さん。十年後、血のにじむような努力によって大学卒業を目前に控えたある日、父に恨みを持つ連中に命を狙われていることを知る。長年絶縁状態だった父から「せめて命の安全が保障できるまで、護衛を受け入れてほしい」と懇願され、さすがにこればかりは受け入れざるをえないお嬢さんの前に現れたのは、闘犬のような見た目に反して穏やかな笑みを浮かべ、丁寧な口調で話す男だった。

■レトリバーのファイブ（主人公）

・身長１９０センチ

・国籍　両親は日本人ではなさそう

・年齢　自分でも分からないけどたぶん２８～３０歳

主に、命のやりとりを前提とした裏社会の護衛任務を引き受けているエスコート会社の社員。

コードネームは「レトリバーのファイブ」。

１番から四番は死んだ。ファイブが死ねばシックスが雇われる。

物腰柔らかで温和な性格だが、忠誠心に溢れ、依頼人を守るためなら犠牲を厭わないため人気が高い。

時々「自分はなぜこんなクズを守ってるんだろうか」と思う瞬間があるので、今回の護衛対象が表社会のお嬢さんで少しホッとしている。

●ヒロイン（リスナー）

護衛対象である「お嬢さん」。

正義感が強く、困っていたり傷ついたりしている人を放っておけないところがある。

■サルーキ
・身長　１８０センチ
・国籍　日本ではなさそう
・年齢　２３歳くらい

エスコートサービスの物資調達係。
人当たりはよくコミュ力強めだが、基本的に他人を信じていない。
敬語でしゃべるが、他人を敬ってるわけではない。
いろんなところに物資を運ぶので、場に溶け込めるように状況に合わせて服装はコロコロ変える。
めちゃくちゃなつきにくい性格だが、なつくと徹底的になつく。

■トラック1　初めまして

「お前は命を狙われているから護衛をつけさせてほしい」と言い、絶縁状態の娘を呼び出した依頼人。
これをきっかけに娘と関係を修復し、便利な手ごまにしようと企んでいるが、娘はその魂胆をお見通しなので「護衛はつけてもらうが貴様となれ合う気はない」とばかりに冷ややか。

【13　背後から】
依頼人「いつまでそこに立ってるつもりだ？
護衛が到着するまで、もう少しかかる。
大人しく座っていなさい。
お茶もケーキも、
お前が好きなものを用意させた」

【ヒロイン「どうして私が好きなものを知ってるの？」】

【13】
依頼人「父親なんだ。
どんなに離れて暮らしていても、
お前の好きなものくらいわかる。
お前が私から隠れているつもりでも、
私はずっとお前のことを見守っていたんだ。」

【ヒロイン「監視してたの？」】

【１３】
依頼人「監視……？
【ため息】まったく……
どうしてそう反抗的なんだ。
私がお前を見守っていたからこそ、
お前の命が狙われてることに、
いち早く気づけたんだ。
身勝手に家出したお前を、
十年もひっそり見守ってきた私に、
少しは感謝してもいいんじゃないのか？」

【ヒロイン「あなたのせいで狙われてるのに？」】

SE　歩み寄る足音

【６　背後から肩を抱くように　】
依頼人「【優しく】なぁ、機嫌を直してくれ。
私だって、こんなことになった責任を
感じていないわけじゃない。
きちんと解決するつもりだ。
だが、それだけじゃなくて……
お前と仲直りがしたいんだ。
また親子として過ごしたい。
お前のためにセキュリティの充実した部屋も借りた。
あんな安アパートは引き払って、
すぐにでも引っ越してきなさい」

【７】
依頼人「お前のことを愛しているんだ。
今までできなかった分まで、
私に父親らしいことをさせてくれ」

SE　ノックノック

【７】
依頼人「っと……護衛が到着したようだ。
そこで待っていなさい。
少し仕事の話をしてから、お前に紹介するから」

【５→１４　歩きながらしゃべる】
依頼人「――おい、ドアを開けてやれ」

SE　ドア開閉

【部屋にはいると、窓の外を見ているヒロインと依頼主がおり、ファイブはまず依頼主を見て喋る】

【１３　ヒロインと違う方向を見ながら】
ファイブ「失礼します。この度は、エスコートサービスの
ご利用ありがとうございます。
ご指名のエスコートは〝レトリバー〟で
間違いありませんか？」

【１４　１３を見ながら】
依頼人「レトリバー？　お前がか？」

ファイブ「え？　はぁ……確かに俺がレトリバーですけど……」

依頼人「【警戒して】以前もレトリバーを指名したが、
来たのはお前じゃなかったぞ」

ファイブ「ああ、そうか。先代のレトリバーをご存じなんですね？
一年前に代替わりしたんです。
先代が四番目で、俺が五番目。
ご不満でしたら、別のエスコートを
呼ぶこともできますけど……」

依頼人「【慌てて】いや、お前でいい……！
敬語を使えている時点で、
ほかの犬より十倍はマシだ」

ファイブ「あっはは！　【少し困って】ですよねぇ。
護衛対象が若いお嬢さんとなると、
まあ……自分で言うのもなんですけど、
俺が一番マシかなって感じの顔ぶれですし。
それで、お嬢さんは……ああ、【ヒロインを見て】そこか」

SE　歩み寄る足音

【7　背後から横顔をのぞくように】
ファイブ「ノックノック　こんにちは、お嬢さん。
俺はレトリバーのファイブ。
今日からあなたの飼い犬です。
お嬢さんのお名前は？」

【ヒロイン、警戒するように「資料に書いてあるんじゃないの？」】

【1】
ファイブ「そうですね。
お察しの通り、基本的な情報は、
すべて資料に書いてあります。
だから実は、俺はお嬢さんには何の質問もしなくてもいい。
――でも、ちょっと不気味じゃないですか？
自分が教えてもいないことを、相手が全部知ってるって。
だから教えてください。
俺はお嬢さんについて、何を知っていてもいいのか。
それ以外は、全部知らないふりをします。
飼い主と犬は、信頼関係が大切ですから」

【ヒロイン「想像してたのと違う」】

ファイブ「っははは！　どんな護衛を想像してたんです？
しかめっ面で一言もしゃべらないような男？
それがお望みなら、できる限り真顔でいますけど……
そんなのが護衛として四六時中ついて回ったら、
お嬢さんの大学生活はめちゃくちゃだ。
あと半年で卒業なのに――っと。
しまった。
これも知らないふりしなきゃいけないやつだった……」

【ヒロイン「大学にもついてくるの？」】

【1】

ファイブ「【明るく】ええ、もちろん。
俺はあなたが大学で授業を受けているときも、
サークルの飲み会に参加しているときも、
深夜のコンビニにアイスを買いに出かけるときも、
絶対にあなたから目を離さない。
なにせあなたを狙っている連中は、
あなたに――
いや、そこにいるあなたのお父様に苦痛を与えるためなら、
どんなひどいこともやる根っからの犯罪者です。
十年も前に父親と縁を切った愛娘の情報を見つけ出し、
さらい、苦しめ、指を毎日一本ずつ切り落としては、
お父様に送りつけてやろうと企んでる」

【ヒロイン、怯える】

ファイブ「怖いですか？
【優しく】うん……いいですね。
それは正しい恐怖だ。
正しく怖がれる人なら、俺は正しく守ることができる。
どうか、その恐怖を忘れないで。
そして恐怖を思い出すたびに、
俺のことを探してください。
【にっこり】俺は絶対に、
あなたの目が届く範囲にいますから――ね？」

■トラック２　追いかけっこ

大学の授業終わり、ヒロインが校門を出ると、ファイブが待っている。
一緒に帰る道中、後をつけられていることに気づき、やり過ごすために恋人のふりをする。

ＳＥ　終業チャイム
ＳＥ　雑踏ガヤガヤ
ＳＥ　ヒロインの足音

【１２→４　教室から出てきたヒロインの斜め後ろにすっと立つ】
ファイブ「授業お疲れ様」

【ヒロイン、ビックリする】

ＳＥ　荷物バサバサ

ファイブ「っとと……！　あー、すみません。
　ビックリさせちゃいましたね。
　足音、できるだけ立てるようにしたんですけど……」

ＳＥ　落とした荷物を二人で拾う

【１　教科書を拾いながら】
ファイブ「ふーん……？　犯罪被害者の心理……か。
　難しい勉強してるんですね。」

ＳＥ　教科書を奪い返す

【ヒロイン「どうしてここにいるの？」】

【1】

ファイブ「どうしてって……説明したじゃないですか。
お嬢さんが大学で授業を受けてるときも、
護衛として近くにいるって。
敷地の外で待ってると思ってたんですか？」

【ヒロイン「だって、関係者以外立ち入り禁止なのに」】

ファイブ「大学のいう〝関係者以外立ち入り禁止〟なんて、
〝どうぞ誰でもご自由に〟と同じ意味ですよ。
その顔……不法侵入だと思ってるでしょう？
やりませんよ、そんなこと。
不審者として通報されたらめんどうですからね。
ほら、入館許可証」

ＳＥ：パスケースを出す軽い金属音

ファイブ「俺は今、この大学の防犯対策に問題がないかを、
ボランティアで視察にきてるんです。
うちの会社、表社会でもそこそこ有名な
警備部門をもってるので。
安心しました？」

【ヒロイン「つまり、部外者でも簡単に大学に入れるってこと？」】

ファイブ「おっと……そこに気づくとは。
ご想像の通り、あなたを守る俺だけじゃなくて、
あなたを狙う連中も、こうやって簡単に大学に侵入できる。
――怖ければ、家まで手を繋いで帰りましょうか？」

【ヒロイン「子ども扱いしないで……！」】

ＳＥ：ヒロイン、歩き出す

【4　斜め後ろに立つ】
ファイブ「あ、すみません。
子ども扱いしたわけじゃないんですけど……
【思いついたように】お詫びに何かおごりますよ。
クレープとか、パフェとか、パンケーキとか」
【ヒロイン「甘い物ばっかり……」】
ファイブ「あれ？　甘い物苦手ですか？」
【ヒロイン「苦手ではないけど……」】
ファイブ「じゃあ、よかった！」
【ファイブ、ヒロインに追いついて隣に立つ】
【3　隣に立つ距離】
ファイブ「俺、甘い物大好きなんです！
でもほら、俺みたいなのが、若い女の子たちばかりの店に
一人で入ると、さすがに浮くしょう？
だから中々行けなくて……」
【ヒロイン「気にせず入ればいいのに……」】
ファイブ「そりゃ、気にしなければいいんですけど……
【困って】怖がらせたら、かわいそうじゃないですか。
でも、お嬢さんと一緒だったら、
付き添いだって言い張れるし、
まわりの子たちも不安じゃなくなるでしょう？」
【ヒロイン「……繊細なんだね」】

【3】
ファイブ「繊細……俺が？
あ、はははは！　はじめて言われました！
あはははは！
【笑いつかれ】あー……はは、笑いすぎですね。
すみません」

ファイブ「じゃあ、豪傑なお嬢さんが、
繊細な俺のこと、居心地の悪さから守ってくれます？」

【ヒロイン、うなずく】

SE　うなずく衣擦れ

ファイブ「やった！」

【3→2　ヒロインの手を引いて走る】
ファイブ「行きましょう。
俺、行きたい店三件くらいあるんです！
急いで急いで！」

SE　走る音フェードアウト

間

【夕方　カフェのテラス席でパンケーキデートの二人】

SE　ナイフをテーブルにおく

【7　カフェで隣に座る距離】
ファイブ「ふぁー……ごちそうさまぁ。
付き合ってくれてありがとうございます。
久しぶりに思いっきり甘い物食べました」

【ヒロイン、ファイブを見て「あなたの胃袋どうなってるの……？異次元……？」】

【１　ヒロインを見ながら】
ファイブ「自分でも時々、俺の胃袋はどうなってるんだろう……
って怖くなりますね。
特に甘い物食べてるときは、本当に際限がないので……
そういうお嬢さんも、なかなかの食べっぷりでしたけど。
――あ。」

【１　近づいて】
ファイブ「ここ、食べこぼし」

ＳＥ　ぬぐう

【ヒロイン「もしかして、私の事小さな子供に見えてます？」】

【１】
ファイブ「ん？　また子ども扱いしてるように見えます？
そういうわけじゃないんですけど……」

【１　やや視線をはずして】
ファイブ「【理由を探すように】うーん、なんだろうな……
うちの会社の依頼人って、大体クズなんですよね。
自分で恨まれるようなことをしておいて、
復讐される段階になったら、金を積んで守ってもらう。
そういう連中のおかげで、
うちの会社も成り立ってるので、
まぁ別にとやかく言う気は何ですけど……」

【1　ヒロインを見て】
ファイブ「【優しく、穏やかに】お嬢さんはただ、
巻き込まれてるだけでしょう？
子供のころに家を飛び出して、
自分だけの力で今日まで生きてきたのに、
十年もたった今になって、
父親のせいで突然命を狙われてる。
護ってあげたいなって思ったんです。
依頼とか関係なく。
だから、ついつい甘やかしたくなる。
意外ですか？　俺みたいな男に良心があるなんて」

【ヒロイン「それややっぱり子ども扱いな気がする」】

ファイブ「あっはは……確かに。
結局、子ども扱いみたいなものなのかも」

SE　立ち上がる

ファイブ「――そろそろ行きましょうか」

【ヒロイン「え？　もう？」】

【7　耳元でささやく】
ファイブ「【少し真剣に】見られてます。
正面の喫茶店の窓際。
サングラスとグレーのジャケット。
三人組。
連絡を取り合ってるようだから、
ほかにも何人か隠れてるかも。
お嬢さんが一瞬でも一人になったら、
袋に詰め込んで車に押し込む気でしょう」

SE　ガタッ

【3　腕を組む距離】
ファイブ「大丈夫、今は怖がらないでいい。
俺がついてますから。
――こっちへ」

SE　足音フェードアウト
間
SE　速足の足音フェードイン

【うまく追っ手を撒けず、路地裏にヒロインを押し込むファイブ】

SE　通り過ぎる複数の足音

【7　至近距離】
ファイブ「しー……俺の胸に顔を伏せてて。
思ったよりしつこいな……
すみません、うまく撒けなくて。
今、あいつらを引き付けておくよう、
会社に要請を出しました」

【ヒロイン「大丈夫なの……？】

【7　至近距離】
ファイブ「【安心させるように】大丈夫。
俺、こう見えてケンカは強い方ですから」

SE　近づいてくる足音
SE　足音が近くで止まる

【7→1】
ファイブ「ちっ……気づかれたか……？
【ため息】しょうがない、ちょっと片付けてくるんで、
一瞬そこで待って――ん！」

【ヒロインからいきなりキスされ、一瞬驚くファイブ。
しかしすぐに応じて恋人のふりに転じる】

【30秒ほどディープキス】

SE　走り去る足音

【1】

ファイブ「……っは……はぁ……
あっははは……！
【楽しそうに】びっくりしたぁ！
キスでやり過ごすって……はっはははは！
映画で見るたびに〝これで見逃すバカはいない〟って
思ってたんですけど、
騙されるやついるんですねぇ！」

【ヒロイン、顔真っ赤】

【1】

ファイブ「……え？
ちょ、ちょっと……
なんでそんなに照れてるんですか……！？
そっちからキスしてきたのに……！
【急に照れて】そんな顔されたら……
お……俺までなんか、落ち着かない気分に
なるじゃないですか……！」

SE　スマホの振動

【1　少し離れて】
ファイブ「あぁ……会社から連絡です。
もう大丈夫だって」

【ヒロイン「帰れるの？」】

ファイブ「いや、今日は家には帰りません。
というか……当分戻らない方がいい。
家に張り込まれてる可能性もありますから」

【ヒロイン「じゃあ、どうするの？」】

ファイブ「適当なホテルを見つけて、
そこに泊まります。
寝込みを襲われるのが一番厄介なので、
俺も同じ部屋に泊まりますけど……」

ファイブ「【少し困って】そんな顔しないでください。
何もしませんよ。
エスコートが護衛対象を襲うわけないでしょう？」

【ヒロイン、具合悪そう】

【1】
ファイブ「お嬢さん……？
【少し深刻に】ちょっとすみません。
おでこ、触りますよ」

【熱を見るため、おでことおでこをくっつけるファイブ】

【1　おでこくっつけながら】
ファイブ「あぁ……熱が出かけてるな。
ストレスで熱が出るタイプですか？
本当に……
【少し安心して】子供みたいだな……。
【ヒロインを抱き上げる】よっと」

ＳＥ　ヒロインを抱き上げる

ファイブ「このままホテルに運びますから、
眠っててていいですよ」

ＳＥ　びっくりして暴れるヒロイン

【3　やや上から】
ファイブ「こら、あばれないで……！」
【ヒロイン「自分で歩ける……！」】
ファイブ「ふらふらしてる人を連れて歩くより、
こっちの方が守りやすいんです！
すぐにタクシー拾いますから、
それまで我慢してください！
【言い聞かせる】恥ずかしくない、
恥ずかしくないから……！」

ＳＥ　一人分の足音フェードアウト

トラック３　看病

熱を出したヒロインを看病してくれるファイブ
そこに物資調達係がやってきて、不穏なことを言って去る。

【ベッドに横たわるヒロインの近くに座っているファイブ】

ＳＥ　電子体温計ピピピ

【７　ベッドサイドに座る】
ファイブ「うーん……熱、下がりませんねぇ。
　ストレスが続いてるからか、
　あのまま風邪をひいたのか……。
　少し、体起こせますか？　はい、お水」

ＳＥ　身じろぎ
ＳＥ　ベッド軋む
ＳＥ　コップの氷がカラカラ

ファイブ「食欲は？　何か食べられそうですか？」

【ヒロイン、うなずく】

ファイブ「よかった。食欲があるなら、
　きっとすぐに良くなります」

【７】
ファイブ「少し待ってて【立ち上がる】」

ＳＥ　立ち上がる
ＳＥ　ベッドサイドから窓際に移動

【7→16　電話を取り出しながら移動し、ヒロインに背を向けるファイブ】

【16　ヒロインに背を向けながら】
ファイブ「俺だ。〝ヒナ〟の熱が下がらない。
薬と、病人が食べられそうなものを適当に用意してくれ。
それと、着替を一式。
そう、二人分。
ホテルと部屋番号はわかるよな？
現地に着く前に折り返して、
電話しながら部屋をノックしてくれ」

SE　通話オフ

【ヒロイン「どこに電話してたの？」】

【16　ヒロインを見て】
ファイブ「すみません、会社にちょっと応援要請を」

【ヒロイン「〝ヒナ〟って？」】

【16→7】
ファイブ「あぁ……ヒナっていうのは、護衛対象のことです。
俺たちの仕事では、
仲間内でも依頼人の名前を口にしないので」

SE　ベッドサイドに戻る足音
SE　椅子に座る

【ヒロイン「あなたも〝レトリバーのファイブ〟だものね」】

【7】
ファイブ「【楽しそうに】そう……俺もコードネームで呼ばれてます。
で、今から来るのは〝サルーキのツー〟。
サルーキは物資の調達係です。
こんな風に、身動きが取れなくなったエスコートに
必要なものを届けてくれる」

【ヒロイン「あなたはファイブなのに、サルーキはツーなんだ」】

ファイブ「あぁ、それは……。
歴代、レトリバーは殉職率が高いんです。
【少しおどけて】真面目に仕事をこなすやつが選ばれるから。
会社でナンバーがファイブまで行ってるのは、
レトリバーだけなんです。
なので、〝ファイブ〟って言えば
俺のことだとみんながわかる」

【ヒロイン「それじゃあ……」】

ファイブ「【クスクスと】どうしたんですか？
急に質問攻めにして。
――何か話してないと不安？」

【ヒロイン、うなずく】

【限界に優しく】
ファイブ「手、握ってもいいですか？」

SE　衣擦れ

【7】
ファイブ「あぁ……熱いな……かわいそうに。
俺がまだ小さいとき……
母さんがまだ生きてたころ、
俺が熱を出すと、こうやって手を握っててくれました。
どこにもいかないよ、大丈夫だよ、
そばにいて守ってあげるよ……って。
そう言ってもらえると、どんなに苦しくても安心できて、
俺はいつの間にか眠ってた。
で、目が覚めるとすっかり熱が下がってる」

ファイブ「【照れて】だから俺、
母さんは魔法が使えるんだって思ってたんです。
でも、ただ俺のことを大切に思ってくれてるだけだった。
それで十分だったんです。
俺にとっては、それが一番の魔法でした」

ファイブ「【ちょっと寂しげに】俺も今、
あなたに魔法をかけられたらいいのに。
――なんて。
また子ども扱いしてますね、俺」

ＳＥ　スマホの着信
ＳＥ　応答

【９の方を見ながら】
ファイブ「ついたか？　部屋の前？
あぁ、今開ける。
【ヒロインに向かって】すいません、ちょっと離れますね」

ＳＥ　ドアに向かう
ＳＥ　ドア開ける

【9】
サルーキ「【軽薄に】どーも。
ヒナの調子どんな感じです？」

【9　ヒロインに背を向け】
ファイブ「報告したとおりだ。薬は？」

サルーキ「錠剤と、粉と、シロップと、注射と、座薬。
なんでもございます」

【サルーキ、ファイブの横をすり抜けて中へ】

【9　7を見ながら】
ファイブ「あ、おい！」

SE　ヒロインに歩み寄る

【1　ベッドサイドに立ち、上から覗き込む】
サルーキ「あー、こりゃ辛そうだ。
一応、サンドイッチとか、ゼリーとか、
おかゆとか用意しましたけど、食えます？
着替えのサイズ大丈夫かなぁ？
ってか、資料の数値とちょっと違わない？
腰のサイズとか……」

【サルーキに触られそうになり、一瞬ビクッとするヒロイン】

SE　衣擦れ
SE　走り寄る足音

【15　サルーキの腕をつかみ】
ファイブ「おい、怖がらせるな！
ただでさえ弱ってるのに……！」

【１５】
サルーキ「いったたた！
ちょ、折れる折れる！」

ＳＥ　振り払う

【１５】
サルーキ「ってぇ～……！
ちょっとは自分のバカ力考えてくださいよ！
【みくだすように】さすが忠犬のレトリバー。
忠誠心がお強いことで。
俺らがどんなに尽くしたところで、
雇い主にとっちゃ俺ら犬なんて家畜以下だってのに……
そんなんじゃ、早死にしちゃいますよ？
先代のレトリバーみたいに」

【１５】
ファイブ「【威嚇するように】帰れ。用は済んだ」

【１５→９　ドアに向かいながら】
サルーキ「あーはいはい。
そう、怖い顔で唸らないでくださいよ。
ほーら、可愛いヒナが怖がってる」

ファイブ「っ……！」

ＳＥ　離れていく足音

サルーキ「じゃあ、俺は次の仕事があるのでこの辺で。
またのご利用を」

ＳＥ　ドア開閉
ＳＥ　さらに離れていく足音
ＳＥ　ベッドサイドの椅子に座る

【サルーキを見送り、ベッドサイドの椅子に座るファイブ】

【１　ヒロインがファイブを見ている】
ファイブ「【困って】すみません、騒々しくて。
【気を取り直し】どれ食べます？
これなら食べられそうかな……」

ＳＥ　袋ガサガサ

ファイブ「はい、あーん」

【ヒロイン「自分で食べる」】

ファイブ「え？　あ、自分で……？
【あわてて】ですよね！
すみません、俺、また子ども扱いしてるな」

【ヒロイン「お母さんがそうしてくれたの？」】

ファイブ「そう……ですね。うん。
母はこうしてくれてました。
ちゃんと自分で食べられるんですけど、
なんだか特別な感じがして、それが嬉しくて」

【ヒロイン、口を開ける】

【1】

ファイブ「【少し困って】どうしたんです？
子ども扱いは嫌なんでしょう？
いいんですよ、俺に合わせて子供ぶらなくても」

【ヒロイン、かたくなに口を開け続ける】

ファイブ「――本当に、俺に食べさせてほしい？
【少し嬉しそうに】そうか……じゃあ、はい」

ＳＥ　すくう
ＳＥ　食べる

ファイブ「美味しい？　はい、もう一口」

ＳＥ　すくう
ＳＥ　食べる

※ファイブが喋っている間、すくう＆食べるＳＥ継続

【ヒロイン「あなたも何か食べないと」】

ファイブ「俺も、お嬢さんが眠ったら
何か腹に入れますよ。
カロリーバーとかは常に持ち歩いてるので」

【ヒロイン「そのサンドイッチ」】

ファイブ「サンドイッチ……？　ああ、ありますね。
サルーキが買ってきたやつ。
でも、これはお嬢さんの食欲が出たときに……
――え？　これ苦手なんですか！？」

【1】

ファイブ「あっははは……！
それは本当に、資料に書いてなかったなぁ。
そうか、好き嫌い……
【しみじみ】そりゃ、ありますよね。
わかりました。
じゃあ、これはありがたく俺が食べておきます。
――と。はい、これが最後の一口」

ＳＥ　すくう
ＳＥ　食べる
ＳＥ　空き容器捨てる

ファイブ「さぁ、薬を飲みましょうか。
どのタイプがいいですか？
もちろん、注射と座薬以外で――ですよね？」

トラック４　遊園地

風邪から復活したヒロイン。
お世話になったのでファイブにお礼がしたいと申し出ると、遊園地に行くことに。うきうきデートトラック。

場所：ホテルの部屋
時間：朝

SE　冒頭のみ軽く鳥ちゅんちゅん

【ヒロインが目を覚ますと、シャワーの音が聞こえる】

ＳＥ　ドアの向こうでシャワーの音
ＳＥ　着信音
ＳＥ　蛇口しめる
ＳＥ　ドア開ける

【シャワーを切り上げ、電話を取るファイブ】

ファイブ「俺だ。
　ああ、熱も下がって、今は落ち着いてる。
だが……一度ホテルを変えた方がいい。
ああ。もう、ヒナがここにいるってバレてる。
サルーキがつけられたんじゃないのか？
何にせよ……まぁ、確かに変な感じだ。
なんというか……殺気を感じない。
気味が悪いよな。ただ付きまとわれてるって感じで……
何かわかったらまた連絡くれ。それじゃあ」

ＳＥ　通話オフ

【体を拭きつつ、通話を切って顔を上げると、ヒロインが起きててビックリするファイブ】

【9】

ファイブ「はぁ……
うわ？！
え？　いつから起きて……！
あ、ちょ……ちょっと待ってください！
今服着るんで！」

ＳＥ　ドタバタ
ＳＥ　浴室のドア開閉
ＳＥ　あわてて服を着る音
ＳＥ　浴室ドア開閉

【浴室から出てきたファイブをじっと見るヒロイン】

ファイブ「【困って】そ、そんなにじっと見ないでくださいよ……
服を着たのに、全裸みたいな気持ちになるから……」

【ヒロイン「肉体美……」】

ファイブ「【呆れて】そういう軽口が出てくるなら、
元気になった証拠ですね。
電話、聞いてたんでしょう？
今日は宿を変えますけど、
その前に大学に寄っていきますか？」

【ヒロイン「学校はしばらく休む」】

ファイブ「え……？　でも、授業は……？」

【ヒロイン「卒業できるだけの単位は取ってあるし」】

【9】
ファイブ「じゃあ、もう一切大学に行かなくても……？」

【ヒロイン「卒業はできるね」】

ファイブ「【やや引き】ゆ、優秀だな……
わかりました。
【気を取り直して】でも別に、ホテルに閉じこもってなきゃいけないわけじゃないんですよ。
不規則な行動をしてた方が、相手も計画を立てにくい。
大学に行かないとしたら……今日は何をしたいですか？」

【ヒロイン「お礼がしたい」】

ファイブ「お礼？　……誰に？
――え？　俺に！？
や、でも俺は別に、
お礼をされるようなことは何も……」

【ヒロイン「あなたが行きたいところがあるなら、そこがいい」】

ファイブ「俺が……行きたいところ……
んー……いや、ないわけじゃないんですよ。
人生で一度くらいは行ってみたい……
みたいな場所が……
あるんですけど……
【やや警戒して】引きません？」

【ヒロイン「危ないところなの？」】

ファイブ「ある意味、危ない場所かもしれません。
いつも誰かの叫び声が聞こえてて……
子供もよく泣いてるし……
恋人はケンカ別れをするっていう……」

【ヒロイン「……遊園地？」】

ファイブ「あたり！　そう、遊園地です！」

BGM　楽しげな音楽フェードイン
SE　ジェットコースター
SE　子供の笑い声

【遊園地のゲートをくぐったファイブとヒロイン】

【3　隣に立つ距離】

ファイブ「うわぁ……本当に来てしまった……」

【ヒロイン「私も実は来るのはじめて」】

ファイブ「え！？　来たことなかったんですか！？
ええと……
こういうところ一緒に来るの、
俺が初めてで大丈夫でした？」

【ヒロイン「どういういみ？」】

ファイブ「だってほら……普通は友達とか、
彼氏とかときたかったんじゃなかと……
初めての思い出って、
長く残りますし」

【ヒロイン「あなたも彼女とくればよかったのに」】

ファイブ「【笑って】俺に遊園地で遊ぶような友達やら
彼女やらがいた事あるように見えます？」

【ヒロイン「うーん……」】

【3　隣に立つ距離】
ファイブ「本当に、全然チャンスがなかったんですよ。
病み上がりの護衛対象の好意に、
ついついのっかっちゃうくらいにね。
けど、具合が悪くなったらすぐに言ってくださいね。
遊園地併設のホテルをとってありますから」

【ヒロイン「そこってめちゃくちゃ高くなかった？」】

ファイブ「ホテルの値段なんて、気にしなくていいんですよ。
経費は依頼人――つまりお嬢さんの父親持ちです。
誰のせいでこんなめにあってるんだって顔して、
使い倒してやればいいんです」

【1　隣に立ったままヒロインを見る】
ファイブ「嫌いなんでしょう？　お父さんの仕事」

【ヒロイン「資料に書いてあった？」】

ファイブ「資料なんて見なくてもわかります。
あなたは真面目で、努力家で……
……すごく綺麗だ」

ファイブ「【困って】少し、踏み込みすぎたかな……
そんなに困らないで。
深い意味はないんです。
【仕切りなおす】行きましょうか。
せっかく来たのに、突っ立って
話してるだけなんてもったいない。
俺、絶叫マシンとか憧れてたんです！」

SE　足跡フェードアウト

【遊園地をめぐり、二人でベンチにならんで座る】

SE　ゆっくりの足音
SE　ベンチに座る

【3　隣に座る距離】
ファイブ「遊んじゃいましたね……丸一日……」
【ヒロイン「楽しかった……」】
ファイブ「正直、不思議な気分です。
どんなに憧れた場所でも、
実際にきたら〝こんなものか〟って
なると思ってたんですけど……
子供のころに憧れた場所が、
憧れたとおりにあって、
憧れたように楽しい……
逆に、現実感がなくなってきます。
夢の中にいるみたいだ」
【ヒロイン「一緒に行く人も重要みたいだよ」】
ファイブ「うん、確かに。
お嬢さんが楽しんでくれたから、
俺も楽しめたのかも」
【1　座ったまま向き合う】
ファイブ「――体調、大丈夫ですか？
無理してない？」
【ヒロイン「大丈夫」】

【1　座ったまま向き合う】
ファイブ「よかった。
少し、気も紛れたのかもしれませんね。
……そろそろ閉園の時間か」

【ヒロイン「また遊びにきたいなぁ」】

ファイブ「また、遊びにくればいいじゃないですか。
今度こそ、友達や恋人と一緒に」

【ヒロイン「あなたは来てくれないの？」】

【1　ヒロインがファイブを見る】
ファイブ「え……俺と……？
【少し困って】あぁ……うん……
そうですね。
また、お嬢さんと一緒に来られたらいいな」

【ヒロイン「そのお嬢さんて呼び方、そろそろなんとかならない？」】

ファイブ「名前で呼んだ方がいいですか？
あぁでも……俺、まだお嬢さんに
自己紹介してもらってないんですよ、実は」

【ヒロイン「あなたも名乗ってない」】

ファイブ「お、俺は職務規定上、
名乗れないことになってるんです……！
会社の同僚だって、俺の本名は知らないくらいで……」

【ヒロイン「じゃあ私もコードネームがいい」】

【1　隣に座って向き合う】
ファイブ「え……？　コードネームを？
つけるんですか？
……お嬢さんに？
【はじけるように】あはははは！」

ファイブ「【まだ少し笑いながら】ああ、すみません。
バカにして笑ってるわけじゃないんです、本当に。
お嬢さんがいつも、予想外の事を言うからつい……
【ふと真剣に】楽しくて……」

【ヒロイン、不思議そうにファイブを見る】

ファイブ「――ん。大丈夫、なんでもありません。
【気を取り直し】いいですね、コードネーム。
つけましょうか。
どんなのがいいかなぁ」

【ヒロイン「ヒナじゃないの？」】

ファイブ「ヒナ？
あぁ……
でも、それは護衛対象のコードネームで……
うーん……まあ、俺達らしいといえばらしいか。
じゃあ、今からお嬢さんのことはヒナって呼びますね」

SE　電話着信

ファイブ「……っと。すみません。会社からなんで、出ますね」

SE　立ち上がり、少し離れる

SE　電話に出る

【会社から「ヒロインを連れて人気のない場所に移動しろ」と電話をもらうファイブ。待ち合わせ場所で会社の人間がヒロインを連れて行くから、そこで護衛の仕事は終わりだと告げられる】

【1　背を向けて】

ファイブ「俺だ。何かわかったか？
ヒナ？　あぁ、ここにいる。
――は？　移動？　今から？
目的地は？
――あぁ、わかる。
車で一時間以上かかるが……
随分遠いところまで行くんだな。そこに何があるんだ？
……終わり？
【やや引きつり】ちょっと待ってくれ、状況がつかめない。
担当が変わるのか？
違うならどうして……
【声を低くして】なんだと……？
冗談じゃない！　そんなふざけた話があるか！
……よせ、それ以上聞きたくない。
ダメだ、断る。俺はやらない。
やらないと言ってるだろう！
話は終わりだ。じゃあな」

SE　通話オフ

【ぽかんとしてるヒロインに向きなおるファイブ】

【1　ヒロインに向き直り】

ファイブ「【安心させるように】すみません、大きい声出して。
ちょっと会社の手違いで、
予定外の仕事が入りかけて……
聴いての通り、断りましたよ。
今の俺には、ヒナの護衛がありますから」

【1　手をつかめる距離】
ファイブ「行きましょう。ほら、手をつないで。
　　はぐれたら危ないから。」

【ヒロイン「また子供扱い？」】

ファイブ「子ども扱いじゃありません。
　　――ほら、手をこっちに」

SE　衣擦れ

【左手でヒロインの右手をつかみ、引き寄せ、指を絡める】

【7　悪戯っぽく囁く】
ファイブ「こうやって指を絡めると……ね？
　　恋人同士に見えると思いませんか？」

【ヒロイン、めちゃくちゃ照れる】

【7　少し離れて】
ファイブ「なんて……
　　俺とヒナじゃ、
　　悪い男にさらわれるお嬢さんって感じか。
　　職質されないように気を付けないと」

ファイブ「あ、そうだお土産……
　　ホテルに戻る前に、何か見ていきます？」

【ヒロイン「見たい」】

【1　ヒロインがファイブを見ている】
ファイブ「うん。俺も何か見ていこうかな。
　　って言っても、俺の場合は自分へのお土産ですけど」

SE　足音フェードアウト
SE　ざわめきフェードイン
SE　アクセサリー手に取るチャリって音

【3　隣に立ってお土産見てる】
ファイブ「へー……遊園地のお土産って、
お菓子やキーホルダーだけじゃないんですね。
アクセサリーとか、
そこらへんの安物より作りがいい」

ファイブ「ショーケースの中なんて、
18金の本格的なやつじゃないですか」

【3　ヒロインの耳をみる】
ファイブ「これなんて、ヒナに似合いそ…っと。
あれ？　ピアス、開けてないんですね」

【ヒロイン「なんだか怖くて」】

ファイブ「怖い……ですか？
確かに、俺も最初のピアスの時は怖かったかも。
アレルギーを起こす人もいますしね」

【ヒロイン「あなたはどうやって開けたの？」】

【1　ヒロインがファイブを見る】
ファイブ「俺ですか？
最初は……そうだな……
【思い出し笑い】確か、アイスピックで
耳を刺されたんですよ。
で、きれいに穴が開いたから、会社のやつらが面白がって、
そのままピアスの穴にして……」

【1】

ファイブ「あれ……？　面白くない？
すいません、怖がらせるつもりじゃ……
あー、でも、
そのあとはちゃんとピアッサーで開けてますよ。
あと、ニードルとか。
もう開ける場所残ってないですけど」

【ヒロイン「人にあけることもできるの？」】

ファイブ「いや、人にあけたことはないですねぇ。
だってほら、ピアッシングって一応医療行為ですから。
他人にやるのは違法なんです」

【ヒロイン、がっかりしてうつむく】

【3】

ファイブ「ピアス……開けたいんですか？」

【ヒロイン「あなたに開けてほしくて」】

ファイブ「ちゃんと病院で開けてもらった方がいいですよ。
いい病院を紹介しますから」

【ヒロイン、沈黙】

ファイブ「……どうしても、俺に開けてほしい？」

【ヒロイン、うなずく】

ファイブ「うーん……そうだなぁ……
じゃあ――」

【3　耳元でささやく】
ファイブ「ちゃんと、秘密を守れますか？」
【ヒロイン、何度もうなずく】
SE　こくこく頷く衣擦れ
【3　耳元で】
ファイブ「【少し笑って】じゃあ……二人で悪いこと、しましょうか」

■トラック5　ピアス

ヒロインにピアスをあけてあげるファイブ
怖くないように耳元ではげましながら
ここから二人ともお互いに完全に男女を意識する領域に入ってます

場所：ホテルの部屋
時刻：夜（夜の環境音いらないです）

【チェックインを済ませ、部屋に入ってくるヒロインとファイブ】

SE　ドア締まる
SE　ビニール袋ガサガサ

【9　ヒロインを見て】
ファイブ「ヒナ。
　　耳を消毒するから、こっちに」

SE　ソファに座る音

【9】
ファイブ「ほら、ここに座って」

SE：足音

【ファイブの右隣に座ろうとするヒロイン。】

【8】
ファイブ「――と。違う違う。
　　隣じゃなくて、足の間。
　　その方がやりやすいから」

SE　ヒロインがソファに座る

【4　背後から抱きかかえるように】
ファイブ「っはは……体、がっちがちだ。
　　ピアスホール、どっちの耳にします？」

【ヒロイン「両方じゃないの？」】

ファイブ「初めてのピアスだから、片方だけあけて、
　　様子を見た方がいい」

【3　耳元で】
ファイブ「こっちの耳にします？」

【7　耳元で】
ファイブ「それとも、こっち？」

【ヒロイン「じゃあ、右」】

【7　耳元で】
ファイブ「こっちでいいんですね？」

【ヒロイン「冷やさなくていいの？」】

【6】
ファイブ「冷やすか冷やさないかは人によりますけど……
　　俺は冷やさない方がいいと思います。
　　腫れてきたら冷やした方がいいですけど」

【ヒロイン「痛くない？」】

【6】
ファイブ「もちろん、痛いですよ。
体に傷をつけるんですから。
鋭い針が柔らかい耳たぶを貫いて、
同時にピアスが耳に装着されます。
一瞬痛くて、あとはじんと痺れてくる。
でも――すぐに慣れます。
人は痛みに慣れるようにできてる。
注射だって、そうでしょう？
刺すときは一瞬痛いけど、
針が刺さってる間はもう痛くない」

【ヒロイン「怖くなってきた」】

ファイブ「怖いですか？
うん……それも正しい恐怖だ。
俺は恐れを知らないバカよりも、
恐怖に従って危険を回避できる人間の方が強いと思う。
――どうします？」

【3　耳もとでささやく】
ファイブ「今なら、まだやめてあげられる」

【ヒロイン「続ける」】

【6　離れて】
ファイブ「そう……。
勇気があるな、ヒナは。
恐怖を感じながら、
それを乗り越えられる人間は少ない」

ファイブ「そうだな……じゃあ、一緒に開けましょうか？
他人に完全に主導権を握らせるより、
そっちの方が少しはマシかも」

【ヒロイン「一緒にって？」】

【6】

ファイブ「ヒナがピアッサーを持って、俺が握るのを手伝う。
　――ほら、耳たぶをちゃんと消毒して。
　後ろの方までしっかり」

SE：右耳に消毒液塗布する音（くすぐったくなる音がよいです）

【4→3】

ファイブ「そうしたら、穴をあけたい位置に針をあてる。
　ここです、この位置。
　そのまま、絶対にピアッサーを動かさないで」

【3】

ファイブ「ちゅ……れろ……」

SE　ビクっとなる衣擦れ

【3】

ファイブ「ふふ……くすぐったい？
　ビックリした勢いで手を握ってたら、
　そこで終わりだったのにな……
　残念。続けますね」

【3　耳を舐めながらしゃべる】

ファイブ「ん……ちゅ……しー、大丈夫。
　大丈夫だから。
　俺の声と、俺の舌にだけ集中してて。
　くすぐったくて、ぞくぞくして……
　ほかのことは何も考えられなくなるでしょう？
　ほら、ふーって……【耳に息吹きかける】」

【３０秒ほど、吐息を混ぜつつ耳を舐める】

SE　右耳でピアッサーがバチンする音

SE　ヒロインがびっくりする衣擦れ

【４　少し離れて】

ファイブ「はい、おしまい。
　綺麗に開いた」

【ヒロイン「じんじんする……！」】

ファイブ「あっと……！　まだ触らないで。
　ピアスホールなんて言っても、
　ようは耳たぶを金属で貫いてるだけなんですから。
　ケガをした場所は、できるだけ触らない――でしょう？
　毎日必ずシャワーで丁寧に洗って、消毒すること。
　もし膿んだり腫れたりしたら、
　迷わず病院に行ってください」

【４】

ファイブ「――で、これは俺からのプレゼント」

【お土産屋さんで見てたピアスを出すファイブ】

SE　アクセサリーの軽い金属音

ファイブ「ピアスホールが完成して、
　ファーストピアスが外れたら……
　これ、使ってください。
　こういうの、ちょっと重いかなって思ったんですけど、
　似合いそうだなって思ったら……贈りたくて。
　その……もし、嫌じゃなかったら……」

【ソファの上でファイブに向き直るヒロイン】

SE　ソファの軋み
SE　衣擦れ

【ヒロイン「嬉しい。絶対つける」】

【1】

ファイブ「【ホッとしつつ照れる】そっか……
　気に入ってくれたなら……うん……よかった」

【明らかにキス待ちするヒロイン】

ファイブ「あぁ、もう……そんな顔して……
　まいったな……護衛対象にこんな……
　服務規程違反どころじゃないな……」

【ヒロイン「二人で悪いことするんでしょ？」】

ファイブ「っはは……！
　そうですね。
　悪いこと、しましょうか、
　二人で。【言いながらキスへ。最初は軽く。段々深く】」

SE　電話の着信

【ヒロイン「電話なってる」】

【1　唇が触れ合う距離】

ファイブ「いいんですよ、無視して。
　どうせろくな電話じゃない。
　それより――」

SE　ドアをどんどん叩く音

【9　ドアの向こうから】

サルーキ「レトリバー！　いるんでしょう？
　勘弁してくださいよ！　社長カンカンですよ！」

ファイブ「……チッ。サルーキか……。
　すみません。
　ちょっと対応してきますから、ここで待ってて」

SE　ソファの軋み
SE　遠ざかる足音
SE　ドア開ける

サルーキ「何考えてるんですか、会社に逆らうなんて……！」

【9　ヒロインに背を向けて】

ファイブ「俺が入ったのはエスコートサービスの会社だ。
　犯罪者は守るが、犯罪はやらない」

サルーキ「あんたのなかで、暴力と殺人って
　犯罪のうちに入らないんですか？」

ファイブ「やめろ、ヒナに聞こえる……！
　いいか？　俺たちはエスコートサービスだ。
　どんなクズでも命を張って守るから、
　裏社会でも信頼を勝ち得てきた。
　なのに、一体いくら積まれてあんな……
　いや、いい。聞きたくない。
　とにかく俺は降りる。
　気に入らないならクビにしろ！」

【9】
サルーキ「【心底からのため息】っはーーーー……っとに。
わかりましたよ。
――じゃあこれ、社長からの届け物」

SE　スタンガンバチッ！

【9　ヒロインに背を向けて】
ファイブ「は、ぐ……？！」

SE　くずおれる
SE　スタンガンバチバチ

【9　倒れたファイブを見下ろして】
サルーキ「じゃーん。どんな巨漢も無力化できる、
ちょっと違法な改造スタンガン。
さすがのレトリバーも立ってられないみたいですねぇ」

ファイブ「おまえ……よくもこんな……ッ！」

【9　ヒロインを見て】
サルーキ「さ、そういうわけでお嬢さん。
俺と一緒に来てもらいましょうか。
大丈夫、怖い思いはするし、
痛い思いもするかもしれませんけど、
たぶん殺されることはないと思うんで」

【ヒロイン「どうして……？】

【9→1　歩み寄りながら】
サルーキ「どうしてって……そうだなぁ……
まぁ、金のためでしょうね。
あんたを守るより、さらう方が儲かる。
だからさらうことにした。
――ね？　わかりやすいでしょ？」

SE　近づいてくる足音

【3　耳元で】
サルーキ「大人しくついてきてくれますよねぇ？
それとも、お嬢さんもこれ――当ててほしい？」

SE　耳元でスタンガンバチバチ

【9】
ファイブ「サルーキィ！」

SE　近づいてくる強めの足音

【1　振り向き】
サルーキ「は……？
おい、なんで立って……！
ちょっと待った落ち着い――がぐっ！」

【ファイブに殴られたサルーキが床に倒れ、そこに馬乗りになって殴り続けるファイブ】

SE　ガシャーン

SE　肉が潰れで血が出る系の水っぽい打撃音断続的に

【9　床で】
ファイブ「【サルーキ殴りながら】研修で教わらなかったか？
敵を！
無力化したかったら！
確実に！
殺せって……！
【人間を殴るときの呼吸のみ、5回くらい】」

サルーキ「あぐ！　やめ……！　頼む！
やめッ……！　ぐ……うぐ……
ふっ……ぐ……ッ」

※この部分、ファイブとサルーキのセリフがかぶるように調整してください

【ヒロイン、さすがにヤバいと感じてファイブを止めに入る】

SE　強めのタックル

【1】
ファイブ「【ヒロインに飛びつかれて動きが止まる】うわ……と……
ヒナ……？　どうしたんですか？
離れて。危ないし、血が付きますから」

【ヒロイン「これ以上殴ったら死んじゃう」】

ファイブ「【軽く笑って】大丈夫ですよ。
死んだらまた、
代わりのサルーキが雇われるだけですから」

【ヒロイン、必死にファイブをサルーキから引きはがす】

ファイブ「わ、わかった……わかりましたから、
そんなに泣かないで。
もう殴りません。ね？
すみません。こわかったですね。
目の前で、こんなこと……」

サルーキ【血に溺れそうになって吐く】ごぼ……ぶふっ……
がは……っは……はあ……！」

ファイブ「ヒナ？
ダメですよ、救急車なんて……必要ない。
俺が片付けてきますから、それで――」

【ヒロイン、救急車に連絡する】

SE　911ダイヤル

【7　電話口】
救急隊員「１１９番　消防です。火事ですか？　救急ですが？
そこの住所は？
だれが、どういう状況ですか？
あなたのお名前は？
大丈夫、今救急車が向かっていますからね」

【ファイブ、ヒロインの行動を見て「普通」が何かをふと理解する】

【1】
ファイブ「……あぁ……そうか。
【から笑い】はは……そうかぁ……
あの時……ヒナが俺にキスしたの……
俺が〝片付けてくる〟って言ったから……」

【1　うつむいて】
ファイブ「綺麗だな……
本当に、綺麗な人だ……」

【1　サルーキを見ながら】
ファイブ「よかったな、サルーキ。
ヒナはお前に死んでほしくないそうだ。
――電話、借りるぞ」

SE　衣擦れ
SE　発信音

【1　ヒロインを見ながら】
ファイブ「社長？
ああ、俺だ。
サルーキはつぶしたが、ヒナが救急車を呼んだ。
だから、掃除屋は呼ばなくていい。
そうだなぁ……
あんたの命令でこうなったんだから、
休暇とボーナスくらい出してやれ。
それで……
俺は今から、ヒナに全部話す。
親父が見下げ果てたクズ以下のゴミだなんて
知らせたくなかったが……
こうなるなら言うしかない。
雇い主の〝親鳥〟に、計画は失敗したと伝えろ」

【ヒロイン「……計画？」】

【1】
ファイブ「そう。
家でした娘を連れ戻すため、
ごろつきを雇って付きまとわせて、
恐怖心を与えたところで、恩着せがましく護衛を雇い、
その護衛がしくじってさらわれたところを、
颯爽と助けて親子関係を修復しようっていう、
安っぽいドラマみたいな計画の話だ」

ファイブ「ついでに、
その企みに気づいたうちの会社が、
〝親鳥〟と手を組んで、
ヒナの心に一生消えない傷を残す仕事を
引き継いだって話もな」

ファイブ「まぁ、これだけ可愛いお嬢さんだ。
どっかの組織のバカ息子と結婚させれば、
かなりの人脈が期待できるって腹だろう？」

ファイブ「――正直、残念だ。
俺はあんたの会社が好きだった。
だが、今日限りやめさせてもらう。
【低く】二度とこの人に手を出すな。
もし彼女に何かあれば、俺はあんたを殺しに行く」

ＳＥ　通話オフ

【ヒロイン、何も言えずにいる】

【1】
ファイブ「……という、お話だったとさ」

ＳＥ　立ち上がる

ＳＥ　ヒロインが怯えて下がる

ファイブ「しー……怖がらないで。
大丈夫、もう近づきません」

SE　遠くに聞こえる救急車とパトカーのサイレン

ファイブ「あぁ……もう行かないと。
逮捕されると、色々ややこしいんです。
俺がここで捕まったら、
会社への抑止力にならなくなるし」

【1　話しながら最後に背を向ける】
ファイブ「心配しないで。
もう怖いことは起こりません。
うちの社長は、俺に命を狙われてまで
あなたを苦しめる茶番に乗るほど馬鹿じゃない。
むしろ、あなたを守ってくれるはずですから」

SE　衣擦れ
SE　立ち去る足音
SE　ドア開ける

【ヒロイン、慌ててファイブについて行こうとする】

SE　足音ストップ

【9　ヒロインに振り向いて】
ファイブ「来ちゃだめだ。
俺はこっち側の人間。
あなたはそっち側の人間。
どうか、そのままそこにいてください。
今日は、本当に楽しかった。
たぶん、俺の人生で一番の日だ」

【ヒロイン「また一緒にこようって言ったのに」】

【9】

ファイブ「そうですね……
本当に、また一緒にこられたらいいのに。
もし、本当にあなたが、また俺に会いたいと思って、
また、一緒に過ごしてもいいって思えたら……
合図を送ってください。
気づきますから、俺、犬なんで。
そのときまで。
――さよなら、俺のヒナ」

SE　足音フェードアウト

■トラック6　エピローグ

ファイブと別れてから半年くらい
大学も卒業し、新生活が忙しいヒロイン
ピアッシングの傷もなおり、ファイブがくれたセカンドピアスに移行している。
それが合図なのだと気づいているけど、もうちょっと様子をみていたファイブ。
しかしファイブがいまだにヒロインを守っていることに気づいた会社から「めっちゃ謝るから復帰してくんない？」と連絡がきた結果、「ヒロインの専属なら戻る」とごり押して会社に戻ったので、満を持して会いに戻る。

場所：遊園地
時間：昼間

BGM：楽し気な音楽
SE　ガヤガヤ
SE　ジェットコースターきゃー

【ぼんやり一人で遊園地に来ているヒロイン。別に何をするでもなくぼーっとベンチに座っているところに、背後からそっとファイブが歩み寄る】

【5】
ファイブ「ノックノック。こんにちは、お嬢さん」

SE　バッとふりむく

【1】
ファイブ「休日の遊園地で、一人でのんびり日向ぼっこですか？
世界で最も洗練された時間の過ごし方だ。
俺もお邪魔してもいいですか？　って……」

SE：立ち上がる
SE　拳で胸あたりを殴る音ぽかすか

【ヒロイン、立ち上がってファイブをなぐる】

ファイブ「あ、ちょっとちょっと！
暴れないで、おちついて！」

SE　殴る音、少しずつゆっくりになり、止まる

【1】
ファイブ「すみませんでした。半年も待たせて。
少し、時間がかかって……」

【ヒロイン「時間って？」】

ファイブ「俺なんかがあなたのそばにいてもいいって、
確信できるまでの時間です」

【7　耳元】
ファイブ「そのピアス、つけてくれたんですね。
本当は、ずっと前から気づいてたんですけど……
きっと、いつか外すだろうと思ってたんです。
一ヶ月か、二か月か……
時間がたったらそのピアスを外して、
俺のことも忘れると思ってた。
でも、半年たった今も、
あなたの耳にはこれがある【軽くキス】」

【7　耳元】
ファイブ「ねぇ……好きって言っても、いいですか？
　　愛してるって言ったら、重すぎる？」

【ヒロイン、めちゃくちゃ照れる】

【1】
ファイブ「っはは。顔真っ赤。
　　また、熱出ちゃいました？
　　実は、遊園地併設のホテルを
　　取ってあるんですけど――」

ファイブ「あぁ、そうだ。
　　個人的な関係になるのに、自己紹介がまだでしたね。
　　俺の名前は――」

END